



併走の列車に抜かれえびす講
 霜の夜や羅紗切り進む羅紗鈇
 焚火終へあとは曠野となりにけり
 凧の入らぬやうに墓を閉づ
 冬麗やなつてみたきは天灯鬼
 楽屋口ふさぐ花束小六月
 折る草の乳に毒あり三島の忌
 夜神楽や尻より出づる夷神

ががいもの舟に乗り来る少名彦
 長月の長きに飽きて出奔す
 鯖雲の要乗鞍岳にあり
 茄子の蒂めぐりなだむる自己嫌悪

俳句俚々

小林貴子

「岳」草創期の主力俳人に小諸の小林秀子さんが居られ、それ以前は野見山朱鳥の「菜鼓火」に所属されていた。宮坂主宰の小諸在住時に句会が行われ、秀子さんと清水治郎さんが参加していた。治郎さんは信州大学図書館職員で、私が学生句会に入った頃、指導は宮坂主宰。そして治郎さんも毎回句会で論陣を張っていた。難解にして正論を解く論客。

「菜鼓火」に寄った俳人に本郷昭雄がある。秀子さん所持の本郷昭雄句集『不知火幻想』（一九六八）が治郎さんの手に渡り、それが私の手元に来た。何人もの形見といったところ。縦長で薄い洒落た造本で、用紙は越前和紙の「特漉紙」

という贅沢さ。ギリシャ神話の眠りの神ヒュプノス像の頭部を生かした瀟洒な装幀。ちなみに作者も美男子だったとか。

登山馬憩ふ手綱を熔岩に垂し 本郷 昭雄
 崩れゆくもののすがたに母昼寝
 円虹に時の天使の翼光り
 筒鳥の啼くたびわれを遙かにす (原句 正字)

『昭和俳句作品年表』の制作過程においてこの句集を繰り返し開いているうち、诗情豊かな句風に改めて心惹かれた。本句集上梓後の昭雄の足どりはあまり詳らかになっていない。しかしネット検索によると、平成五年頃まで「晨」に俳句を発表されていたとか。また「晨」を調べてみたい。